

ワークショップ

「産婦人科検診におけるコルポ診とLBC法」

誠仁会 大久保病院 婦人科・検査科細胞診断部、明和病院 検査科病理 小笠原 利忠(MD)
誠仁会 大久保病院 検査科細胞診断部 圓井 知江(CT)、川越 道夫(CT)
濱砂 美咲(MT)
明和病院 検査科病理 松林 謙治(CT)、狭間 結衣(CT)
渥美 亜紀子(CT)、覚野 綾子(MD)
恵生会病院 産婦人科 内藤 子来(MD)、脇本 栄子(MD)

<はじめに>

子宮頸部病変の診断はまず細胞診より始まる。細胞診で異常を認めた場合コルポ診・狙い生検を行い、正確な病理診断のもとに取り扱いが決定される。今回は細胞診（従来法とLBC法、採取器具）の問題点、細胞診判定に必要なコルポ診の知識、病理診断との相関性を考えながら、細胞診とコルポ診との微妙な関係を考える。

<細胞診>

従来法とLBC法が用いられているが、現在本邦ではLBC法採用は20～30%で未だ従来法が主流である。LBC法では不適正検体の減少、スクリーニングの簡便化、HPV検査への応用など利点が多く、異常細胞を見つけ出すスクリーニングに於いてはLBC法を推奨する施設が多い。

一方、背景を重視し、異常細胞の出現部位や正常細胞との係わり合いを観る場合は従来法が優れている。

いづれにしてもより良い標本を作製するには、まず細胞採取を適切に行う必要がある。

①採取部位の問題：

産婦人科診療ガイドライン婦人科外来編2014でも記載されているように、子宮頸部の扁平円柱上皮接合部（SCJ）領域を中心に細胞を採取する。頸部病変の好発部位であるSCJより細胞を採取することが肝要である。成熟扁平上皮・各段階の化生上皮・円柱上皮などの採取が理想的である。図

1に採取部位と出現細胞を示す。

②採取器具の問題：

「妊娠女性以外では綿棒ではなく、へら・ブラシ（ブルーム型を含む）での細胞採取を行う（産婦人科診療ガイドライン婦人科外来編2014）。種々の採取器具が考案され、それぞれに利点・欠

図 1
採取部位と細胞像

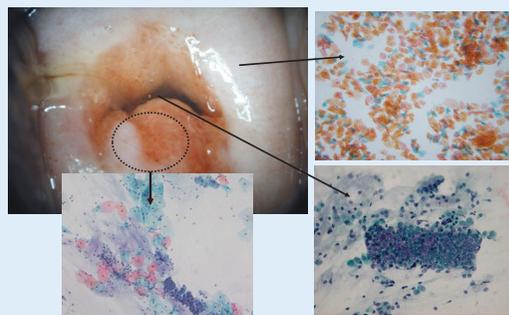


図 2
採取器具と細胞採取



点が存在する。図2に採取法を示す。採取部位を考慮すればブルーム型ブラシが理想的である。扁平上皮領域・SCJ領域・円柱上皮領域が一度に採取される優れたものである。但し万能ではなく、子宮頸部の大きな症例や子宮膣部びらん幅広い症例には採取部位を考慮し注意を要する(図3)。また、このブラシはLBC標本にも用いられている。

<コルポスコピー>

コルポスコピーは子宮膣部を拡大鏡にて観察する単純な検査法であるが、種々の所見があり適切な生検部位を選定するには熟練が必要である。代表的なモザイク所見と生検所見を図4に示す。子宮膣部前唇に見られる軽度所見部位にはCIN2が存在し、後唇の高度所見にはCIN3が存在する。図5は細胞診(従来法)・コルポ診・組織診を示す。細胞像を見てコルポ所見を推定する→コルポ所見より組織像を推定する→細胞診とコルポ診と組織

診の整合性を検討することが不可欠である。正確な診断のためには、詳細なコルポ所見の観察と細胞診に出現した細胞の出所(故郷)を探ることが肝要である。

③症例提示

症例は45歳 3回経妊・2回経産、出血を主訴として来院、図6に頸部擦過細胞診(従来法)を示す。

弱拡大では腫瘍性背景の中に角化型、非角化型多数の異型細胞が出現し、強拡大では角化型紡錘形異型細胞の近傍に異型のない表層型扁平上皮及び化生細胞の集団が出現している。細胞診での判定はSCC、推定病変は角化型扁平上皮癌であるが、癌の周囲に非癌組織の存在が示唆される細胞像である。

同一症例のLBC標本を図7に示す。出現異型細胞の多形性より推定病変として角化型扁平上皮癌の存在が疑われるが、臨床像の推定は従来法より

図3 ブルーム型ブラシ びらん幅広い症例

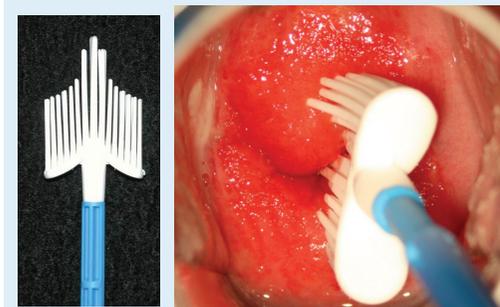


図4 コルポスコピー モザイク

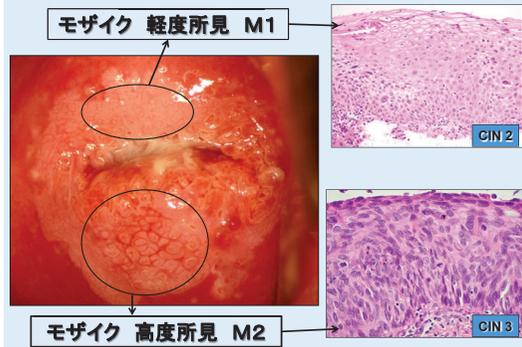


図5 細胞診・コルポ診・組織診

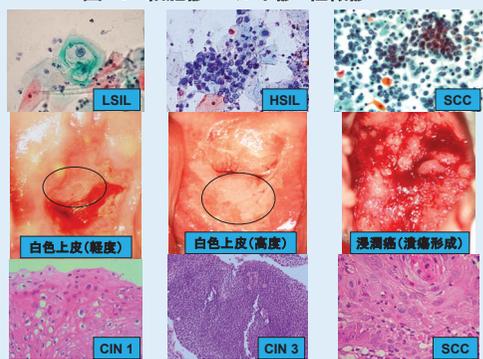
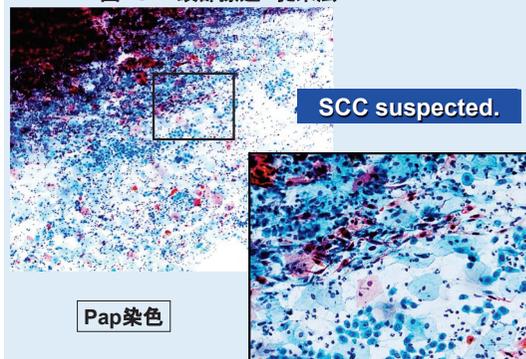
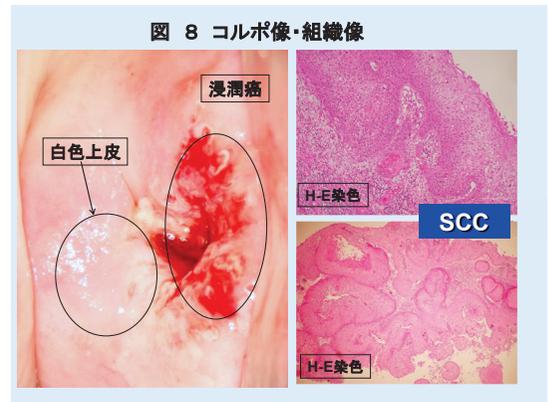
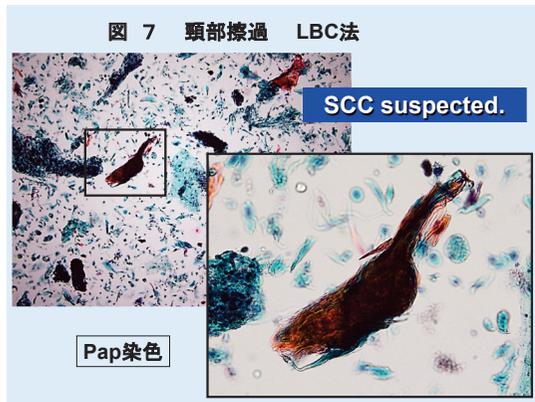


図6 頸部擦過 従来法





困難である。

図8にコルポ像・組織像を示す。細胞診（従来法）で推定した如く、非癌領域を持つ扁平上皮癌であった。

<まとめ>

従来法・LBC法の賛否両論飛び交う中で共通する問題点として細胞採取が考えられる。適切な部位より適切な器具を用い適切な数の細胞を採取する必要がある。十分量の細胞を詳細に観察しながら単なる細胞診判定のみに止まらず臨床像（コルポ像・組織像）を考えることも大切である。細胞検査士が観る細胞、病理医が観る細胞、臨床医が観る細胞、それぞれ違いはあるものの患者様に不利益が生じないように努力を重ねてゆきたい。

今回の演題発表に関し開示すべきCOIはありません。

参考資料

- 1) ベセスダシステム2014 アトラス 2016/6/10 丸善出版株式会社
- 2) 改訂コルポスコピースタンダードアトラス日本婦人科腫瘍学会2014 2014/4/1 中外医学社
- 3) 産婦人科診療ガイドライン婦人科外来編2014 2014/3/30 日本産科婦人科学会事務局
- 4) 子宮頸癌取扱規約 第3版 2012/4/1 金原出版株式会社

- 5) 細胞診ガイドライン 1 婦人科・泌尿器
2015/3/31 金原出版株式会社